

# 住吉大社の巫女をめぐる一考察

——『住吉松葉大記』の記述を中心に——

堀 岡 喜 美 子

はじめに — 本研究の問題意識 —

大阪市西南部、大阪湾よりやや入り込んだ地に鎮座する住吉大社は、初詣には毎年二百万人を超える人々が詣でる大阪屈指の大社であり、その歴史は古墳時代以前に遡るとされている。境内には多くの摂社、末社が祀られ、本殿とこれらの社で催行される祭礼神事は年間百前後の数となる。その中においても本殿で催行される御田植神事や夏越神事（現在は住吉祭に含まれる）は、地域の人たちも多く参加し盛大、かつ華やかに行われている。御田植神事は全国各地においても催行されている神事であるが、当社の御田植は極めて古態を残しているとされ、巫女や御稔女、芸妓による植女<sup>〔1〕</sup>、近在の女性たちによる替植女など多くの女性達の奉仕する姿が見られる。また、夏越神事には夏越女、升之市神事には市女が奉仕されるなど、過去における巫女の活躍を髣髴させる多様な女性の神事への参加をみることができる。

住吉大社の社人、梅園惟朝が元禄期に記した『住吉松葉大記』（以下『松葉大記』とする）には、住吉大社縁起、および神事一般、組織運営等について当時の資・史料を参考にしつつ詳細に述べられているが、その中において注目されるのが巫女についての記述である。惟朝は神事について式次第は勿論、神事に奉仕する人々の役割や立位置

などを詳細に記述している。そこには巫女の神事における役割についても実に具体的に記されており、当時およびそれ以前の神事に巫女がどのように関わったのかがよく解るものである。また、「職役部」には巫女の職掌およびその組織の特徴についても詳しく記されている。こうした近世における大神社巫女の記録は、管見する限りにおいて極めて珍しく、その内容は巫女研究において非常に貴重なものであると考えられる。もちろん、現代における神事の女性奉仕と必ずしも比定されるものではないが、巫女研究上極めて興味深い史料であることは間違いないであろう。

巫女に関する研究は柳田国男を嚆矢とし、民俗学、文化人類学<sup>(2)</sup>などにおいて膨大な研究がなされているが、これらの多くは近現代のフィールド研究を主軸としている。勿論、中山太郎や山上伊豆母などにより巫女の歴史研究<sup>(3)</sup>はなされているが、その多くは古代から中世における巫女研究であり、遊女と芸能・文芸との関わりを主題としたものといえよう。近年、近世巫女の研究は、西田かほるや中野洋平によって進展をみているが、両氏の研究主題は共に地方における神社神子、および梓神子などの民間宗教者であり、大神社巫女とは違った視点での研究であるといえる。<sup>(4)</sup>大神社巫女についての研究は、山中薫による備中一ノ宮の中世巫女の研究、および脇田晴子の中世祇園社の巫女研究が挙げられるが、いずれも中世神社巫女の研究であり近世には至っていない。

以上の巫女研究の現況より、近世における神社巫女（特に大神社巫女）についての研究は未だ十分になされていない、研究の進展が求められる分野であるといえよう。近世神社巫女研究遅滞の大きな理由は、①先に述べたように今までの巫女研究の中心が近現代を研究対象とする民俗学や文化人類学であること、②歴史学において神道・神社研究は戦前戦後ともに十分進展がみられず、<sup>(5)</sup>当然神社巫女も研究視野に入り難かったこと、③女性と宗教に関する研究においては、女人往生など仏教との関わりや古代における祭祀上の女性の研究が主となっており、近世社会における女性と宗教に関する研究に関心があまり向けられなかったこと、<sup>(6)</sup>などが挙げられると考える。

したがって、本研究の目的の第一義は、『松葉大記』に記述されている住吉大社巫女の姿を明らかにし、未だ充分に解明されていない近世神社巫女研究の事例集積の一助とすることにある。加えて近世の新たな女性像構築のひとつとなればと考える。

尚、「みこ」の表記は柳田国男が「巫女考」で指摘しているように、巫女、神子、御子、ミコなどがあるが、本稿では『松葉大記』に記された「巫女」を表記し、転載資料の使用表記などの必要に応じて他の「みこ」を表記することとする。

## 一 住吉大社の歴史

住吉大社巫女（以下住吉巫女とする）を論じるにあたって、社の祭礼や神事、および住吉巫女の特異性をより理解されるよう、その縁起と歴史について概括しておきたい。

### 1、住吉大社創祀縁起と神功皇后

住吉大社の祭神は第一本宮の底筒男命（そこつつのおのみこと）、第二本宮の中筒男命（なかつつのおのみこと）、第三本宮の表筒男命（うわづつのおのみこと）、そして第四本宮の息長足姫命（おきながたらしひめのみこと）（神功皇后）の四神である。記紀によれば筒男命の三神はイザナギノミコトが黄泉国の穢れをすすぐために、日向の国で禊祓をした時に海の中から出現した海神とされている。これら四神がどのように今の住吉の地に鎮座されるようになったのか。『日本書紀』巻第九「神功皇后」には皇后が熊襲征伐に際して、住吉三神に導かれるようにとの御託宣がり、朝鮮遠征帰還後、(1)のように三男神が述べたとある。また、その後忍熊王の反乱を征しようといふ紀の国より難波に向かう時、船が上手く航行せず占うと、(2)のような詞があったと記されている。

(1)是に、軍に従ひし神表筒男・中筒男・底筒男、三の神、皇后に誨へて曰はく、「我が荒魂をば、穴門の山田邑に祭はしめよ」とのたまふ。時に穴門直の祖踐立・津守連の祖田裳見宿禰、皇后に啓して曰さく、「神の居しまさ欲しくしたまふ地をば、必ず定め奉るべし」とまうす。則ち踐立を以て、荒魂を祭ひたてまつる神主とす。仍りて祠を穴門の山田邑に立つ。

(2)天照大神、謂へまつりて曰はく、「我が荒魂をば、皇后に近くべからず。當に御心を廣田国に居らしむべし」とのたまふ。(中略)

亦表筒男・中筒男・底筒男、三の神、誨へまつりて曰はく、「吾が和魂をば大津の淳中倉の長峽に居さしむべし。便ち因りて往来ふ船を看さむ」とのたまう。

(坂本太郎・家永三郎等編日本古典文学大系『日本書紀』岩波書店より)

すなわち、底筒男ら三男神は神功皇后が朝鮮遠征した際の海運の守り神であり、遠征後、住吉三神が神功皇后に「我が荒魂を穴門の山田邑に祭るよう」とおっしゃったので、土地の豪族である津守連等の力を借りて穴門(長門)(現在の山口県下関)に鎮座した。しかし、その後、卜占により天照大神を広田国に祭り、また、住吉三神も「吾が和魂を大津の中倉の長峽に居るようにして、海運の守り神とせよ」とおっしゃったので住吉の地に三神を祭った、というのである。住吉大社創祀場所に関しては、記紀の内容解釈と『住吉神代記』の記述とが相まって様々な説が唱えられているが、<sup>8)</sup>『日本書紀』からみるには以上の内容が住吉大社創祀の大体の縁起といえよう。尚、伝承によれば、皇后摂政十一年辛卯歳(二二一)に住吉の地に三神が祀られ、後に雄略天皇の時に皇后を合祀したとされている。<sup>9)</sup>

神功皇后については、記紀の記述に矛盾があり実在しなかった人物であるという説や、その他様々な伝説があるが、<sup>10)</sup>住吉大社の神功皇后は創祀縁起にあるように、三韓を征するに当たって住吉三神が守り抜いた重要な歴史上の

人物として神格化されているといえよう。

これら四神は東奥に第一本殿、前方に順に第二本殿、第三本殿と並び、第三本殿の南に第四本殿が立つ形式となっており他の神社には見られない形式である。一説によれば三神が神功皇后をお守りしている形であるといわれている。『松葉大記』にはこの四本宮を順次廻る形式をとっている神事次第も多くみられ、住吉大社神事次第の特徴を示すひとつといえよう。また、鎌倉時代は盛大に催行され、近世では廃れた「広田御狩」神事は、『松葉大記』によると、神功皇后の故事に因んだ神事として巫女が男装しての狩を模倣したものであったようだ。各本殿は同大形式でその建築様式は住吉造といわれ、神社建築様式において極めて古式を残しているとされている。また、伊勢神宮と同様の二十年毎の遷宮が室町時代まで行われていたが、現在は本宮の修復等をもって遷宮としている。<sup>11)</sup>

## 2、平安時代から中近世社会における住吉大社

住吉大社は平安初期より、『延喜式』『神名帳』での官幣名神大社として、月次・相嘗・新嘗祭・八十嶋祭などの重要な朝廷祭祀を奉じ、朝廷とは深い関係のある神社であった。

永保元年（一〇八一）、白河天皇執政時、律令制度の弱体化による神社統制を見直すため、朝廷の奉幣を司る神社二十二社に、朝廷の重大事や、飢饉・地震などの天変地異発生時には特別の奉幣を与え祈禱などを行わせた。これがいわゆる二十二社制度であり、上・中・下と格付けられ、住吉大社は中の摂津国一宮として位置付けられた。<sup>12)</sup>

惟朝は「供膳部十二」最初に、「然建武以来四海事戦伐不敬神明、権門勢家押領神物、尋遭文禄検地、苛政暴汚之余纔存二千六十石」と記している。

「建武以来」とは後醍醐天皇の「建武の新政」以来の南北朝、室町幕府を指すもので、大寺社、貴族の荘園支配が崩れ、次第に社領が地方の有力豪族の支配に移っていったことを意味するのである。<sup>13)</sup>「文禄検地」とはもちろ

ん豊臣秀吉の太閤検地を意味し、大部分の大神社がその広大な所領を没収されているが、住吉大社は秀吉によって二千六十石が寄進されている。徳川家康は元和元年（一六一五）、秀吉と同様の石高を安堵し黒印状を発しているが、この石高は伊勢神宮四万石、春日大社の二万二千石には及ばないが、賀茂社の二千七百石に次ぐ二十二社中八番目の石高であった。このことは神領が大幅に減少したとはいえ、住吉大社が近世においても、二十二社の格を充分に保たれていたことを意味するといえよう。

では、近世社会、大坂において、住吉大社はどのような存在だったのだろうか。

寛政期に刊行された『住吉名勝図会』や『摂津名所図会』には住吉大社の地形や祭礼とともに、住吉の浜での潮干狩り、松林の中での茶屋の賑わいの様子が詳しく絵入りで紹介されている。また、『難波噺』など大坂を巡る紀行記や日記などには必ず住吉を訪れた記録がある<sup>15</sup>。また、江戸時代後期に十返舎一九が著わした『東海道中膝栗毛』の最終地点は住吉であり、参詣はそっちのけで茶屋で遊ぶ弥次さん、喜多さんの姿がえがかれている。

松尾芭蕉、井原西鶴、蜀山人など文人も訪れ住吉に因んだ俳諧、詩を詠んでおり、また、航海の神様として、全国の廻船問屋等の篤い崇敬を受けていた<sup>16</sup>。住吉大社は文人、商人はもとより庶民の篤い信仰・参詣の場であるとともに、白砂青松の行楽の地としても全国に名を馳せていたといえよう。

このような住吉において、特筆に価するのが住吉巫女による神楽であった。

享保二年（一七一七）に刊行された『墨江紀略下』には、住吉における名所、八景などが四八にわたって挙げられているが、本殿、神宮寺、松林、輪橋（現在の反橋）に次いで五番目に神楽が挙げられ、「第五日日神楽是参禮之人日日奉賀就神楽所而請神楽或就廟庭奏之亦有焉」と書かれている。すなわち、住吉の神楽は日々参禮の人々によって奉納され、それは神楽所でも廟庭でも奏されている、というのだ。また、一八二八年に大坂を訪れたシーボルトは「住吉大明神という神道の祠（やしろ）に詣でたるに、神に仕ふる婦人たち神楽てふ舞踏を執行し居るた

り<sup>①7</sup>」と、住吉に詣でた印象をこれのみ記している。すなわち、住吉巫女の神楽は近世をとおして多くの人々に奉じられる靈驗性と、人々を魅了する芸能性を合わせ持ったものであったといえよう。

### 3、神宮寺について

住吉大社は、他の多くの大神社がそうであったように神仏習合の神社であり神宮寺を伴っていた。『松葉大記』の「寺院ノ部一神宮寺」によれば、孝謙天皇時の天平宝字二年（七五八）戊戌の時、靈告があったことにより創建され、本尊は薬師如来で、三韓の新羅寺のものを頂いたので神宮寺または新羅寺とも呼ばれていたとのことである。『松葉大記』には僧侶とともに神事を催行されることが多く記されており、社の神事執行において神宮寺の存在は重要であったことは明らかである。「伽藍・殿舎は魚鱗のように相峙し、仏堂八字に僧坊十余の規模を誇った。」<sup>①8</sup>神宮寺は江戸時代の絵図にも画かれており、住吉大社の北に位置し、その敷地は住吉大社とほぼ同規模であった。

神宮寺は明治維新の神仏判然令に伴い廃寺となり、多くの建物と什器を失ったがその行方がどうなったかはほとんど定かではない。その中において、徳島県阿波市に在る切幡寺の大塔（重要文化財）は神宮寺西塔が売却されその後修復されたものであり、「現存する唯一の二重方形塔で、天台宗寺院の本来の形式を伝えるとされる。」<sup>①9</sup>という。西塔は江戸期における神宮寺の荘厳な様相を示す唯一の遺産である。他の建物や什器がどのように処理されたのか、興福寺や日吉社の例をみれば想像がつくが、多くの優れた建築物や什器、および古文書がほとんど残されていない状況は実に残念であるといえよう。

## 二 『住吉松葉大記』「神事部」に見える巫女の姿

### 1、『住吉松葉大記』と「神事部」について



本稿のテキストである『松葉大記』とはどのような書物なのか。

「はじめに」に述べたように著者は住吉大社社人梅園惟朝である。梅園氏は『松葉大記』によれば、住吉大社の職役において「客方」に属していたという。客方とは惟朝によれば、神功皇后征韓時弓部として活躍した一族であり主に警護に従事したとのことである。惟朝については資料が乏しく元禄年間（一六八八―一七〇三）に活躍した社人という以外、その生没年、および人物像についても詳細は不明とされている。しかしながら住吉大社権禰宜小出英詞氏は「住吉社人梅園惟朝の人物について」<sup>(21)</sup>において、惟朝が極めて学才に溢れ、学問的活動を活発に行い後進への指導も行っていたことを明らかにしている。『松葉大記』はこうした惟朝の人物像が窺えるものであり、草稿であり未完成の書ではあるが、多くの史・資料を駆使して著述された優れた歴史的書物といえる。

本稿のテキストは、大阪市史編纂所が平成十二年から十六年にわたり翻刻したものであるが、これは惟朝の後裔梅園秀秋氏が、一九七七年に住吉大社に奉納した惟朝自筆の『住吉松葉大記』を底本としている。<sup>(22)</sup>底本は二十三巻二十七部から成り、その内容は出現部、鎮座部、神功部などの創祀縁起、歴史は勿論、摂社、末社、名所案内、社人の職役、寺院、舞楽など多岐にわたり、部の種類は二六にもおよんでいる。

その中において巻第十二・十三・十四の「神事ノ部十一」には、一月から十二月までに催行される神事について、その式次第、奉仕参列者の立ち位置はもちろんのこと、舞楽、神楽などの奉納芸能についても事細かく記されている。惟朝は部の最初部分に次のように述べ、この部がどのような構成からなり、その意図はどこにあるのかを明らかにしている。

（前略）

先全書棟国旧記間加今按弁古今同異往々損益筆削、於此齟齬合塩梅銓楯催親和、往昔当今神事盛衰一覽郭如矣、四五百年後訪棟国於泉下使其功高乎今日者舎我其誰乎、（後略）



「棟国の旧記」とは、文永年間（一二六五～七四）に住吉大社の祠官津守棟国が著わした『住吉太神宮諸神事之次第記録』（以下『諸次第』とする）を指し、惟朝はこの書を「文句雅ナラ不ト雖トモ丁寧細密焉トシテ愛シツ可シ」と述べ、文章は美しくはないが内容は優れたものであると評価している。そして惟朝はこの優れた『諸次第』に書かれた神事の次第内容と、当時の様子を比較検討することにより「盛衰一覽」とし、棟国没後四五百年、（惟朝が没したなら）黄泉の世界を訪れその功を高く称えようではないか、というのだ。

「神事部」は惟朝の述べているように、まず、『諸次第』の月毎の神事内容が記され、段を下げ、「今按二」に始まる惟朝の文章が続く構成で成っている。したがって、「神事部」の内容はいうまでもなく、『諸次第』の記された鎌倉中期の神事の様子と元禄時代の神事次第がよくわかるものであり、また、これらの変化に対する惟朝の論も詳述されており、正に「盛衰一覽」となっているといえる。

巫女に関する記述もちろん同様に記されており、神事に奉仕する巫女の姿の鎌倉時代から元禄時代の変化も実によく理解できる内容となっている。『諸次第』（鎌倉期）に記された巫女の姿が『松葉大記』時代（元禄期）ではどのように変化しているか、惟朝の記述に従い一覽にしたのが次の表である。

『諸次第』（鎌倉期）	『松葉大記』（元禄期）
<p>月日</p> <p>一月</p> <p>九日 「広田御狩」夜恵比寿社の前で巫女舞。</p> <p>十日 巫女北座・南方座、巫女舞。</p> <p>酌巫女の役。</p>	<p>九日夜恵比寿社の前で巫女舞踏・肴無。</p> <p>巫女神楽の諸役、</p> <p>先づ神楽を奏し、巫女両檢校以下一人別ニ舞う。</p>

<p>二月 四日 「祈年穀ノ御祭」 勘所司八人・巫女等著座、 酒肴一献の後之を撤する。</p> <p>五日 「酉の刻国祭」 巫女宝蔵の前に座る、勘所司の屋酒肴を 進める。</p>	<p>「祈年・新嘗両度ノ御祭」 巫女両檢校二人同じく神前の左右に並ぶ。 巫女神宝所から土器を持ち左右に置く。 机上の土器各々二枚を取る。 巫女此事を神盃参ると云う。 「国祭とは豊年嘉穀成就の御祭也」 今日御厨竈の前で神楽を奏する。</p>
<p>三月 八日 「一切経会」 巫女舞台に登り舞の供養。</p>	<p>巫女舞台に登ることは今は無し。 六月晦日には末の巫女堺に供奉する。</p>
<p>四月 四日 「卯日ノ御祭」 請取つて禰宜に授け、祝詞を申す。</p>	<p>今日巫女二人神輿に供奉する。</p>
<p>五月 不定期 「御田植」 巫女同じく西の渡の殿上の前の庭に座る。</p>	<p>巫女登場の記述は見られない。</p>
<p>六月 晦日 「荒和ノ御祓」 巫女・馬長・田楽御前を渡つて南に行く。</p>	<p>「所謂夏祓・夏越ノ祓・茅ノ輪」 今皆断絶してしまっている。</p>

<p>八月</p> <p>八日 「花摘ノ御供ト名ク」</p> <p>巫女の登場所面見られず。</p>	<p>今日巫女二人 末の巫女二人毎年交代供奉。</p> <p>神輿に供奉して堺まで行き、開口の社の神樂所に巫女著座し陪膳は開口の巫女の役である。</p>
<p>九月</p> <p>十三日 「相撲会」</p> <p>巫女舞台に登り供舞する。</p>	<p>「今朝ノ御供又ノ名ハ陰ノ御供」</p> <p>巫女御幣を持って中門の下に立つ。</p> <p>巫女・所司神殿の左右に立、権少霸祝巫女の幣を取って正禰宜に渡す。</p>
<p>十一月</p> <p>「相嘗ノ御祭」</p> <p>卯ノ日 ・南座権官・勘所司八人衣冠南北、</p> <p>・東西行著座繩筵ヲ敷、巫女同じく座す。</p> <p>辰ノ日 ・御神樂が終わってから巫女等舞有り</p> <p>・次に御神樂衆がすわり、侍者の御前の壇上に巫女著座。</p>	<p>相嘗とは此月の新穀を飯に炊いて諸神に奉すこと。</p> <p>卯日の午刻に御厨の内に於て神供を備へ祝詞を奏する。</p> <p>酒肴夜一の神殿の御前に於いて連連踏・御神樂を行う。</p> <p>御神樂はあるが巫女の登場所は見られない。</p>

この表から読み取れる事柄を検証してみたい。

## 2、神事における巫女の役割

『松葉大記』に記された年間に催行されている神事の数はいくつあるかは、鎌倉期、元禄期ともに約五十と考えられ、その中において『諸次第』（鎌倉期）では十、『松葉大記』（元禄期）では七の神事に巫女が奉仕している様子を窺う事ができる。これらの数は「巫女」の表記のある事項のみを数えたものであるが、神楽奉納など実際の奉仕はもっと多いとも考えられるので、他の史料も参考にしながら検討するものとする。

まず、巫女の奉仕内容について、鎌倉期と元禄期とに共通する内容についてみてみたい。

巫女が一番の役割とされる神楽奉納についてであるが、鎌倉期では、一月九日「広田御狩」、十日瑠璃寺修正会、二月五日「酉刻国祭」、三月の一切経会、九月の「相撲会」（鎌倉期には名称がっていない）、十一月「相嘗御祭」辰ノ日の五神事にみられる。元禄期ではこの五神事中「一切経会」において「巫女登舞台今無此事」とあり巫女による神楽が無くなっている。「相撲会」は『松葉大記』には巫女の神楽の記載はないが、津守国平が天和三年（一六八三）に著わした『住吉大神宮年中行事記』（以下「行事記」とする）には、「巫登舞台舞」とあるのでここでは神楽の奉納はあったと思われる。また、「相嘗御祭」についても、『行事記』に「酒肴一献次御神楽始」「巫舞事畢」とあり、ここでも巫女の神楽奉納はあったと思われる。したがって、巫女の神楽奉納は神事が退転した中においても多くが残されていたといえよう。

神楽以外の奉仕はどうであろう。

鎌倉期では、二月四日「祈年穀御祭」、五日「酉刻国祭」、五月「御田植」、六月「荒和御祓」、十一月「相嘗御祭」卯の日に巫女の登場が見られるが、ここでは神楽の奉仕ではなく神事参列、あるいは執行役としての巫女の姿が現れている。特に六月の「荒和御祓」では馬に乗って馬長や田楽らと供に堺の頓宮宿院まで向かうのであり、この神事の様子は一五六二年のフロイスの記録<sup>(23)</sup>として次のように記されている。

（武器や武具を携えた神人や白衣の神官たちが通り過ぎた後）

この後に彼らの女妖術師（巫子）たちが馬で進むが、彼女たちは同様に白衣をまとい、非常に美しく飾り、おびただしい数の婦人たちに付き添われ、歌いながら行く。その後に輿を担いだ大勢の武装した人が来るが、（後略）（『フロイス日本史』<sup>24</sup>より）

この記録より、巫女の役割は神輿の先導、付き添い役を担っていたと考えられる。

元禄期では、二月四日の「祈年・新嘗御祭」での土器奉納、四月四日「卯日御祭」の神輿供奉、六月晦日の神輿供奉、九月八日「花摘御供」の御幣持ち、などが挙げられ、ここでも神楽奉納以外に多様な役割を担っていたことがよくわかる。

これらより、巫女の奉仕内容、役割は鎌倉期、元禄期をとおして神楽奉納だけではなく、神事執行においても重要な役割を果たしていた事が明らかになったといえよう。

### 3、鎌倉期から元禄期における巫女奉仕の変化

では、鎌倉期と元禄期における巫女奉仕はどのように変化したのか、退転と隆盛の両面について検証していきたい。

まず、神事の規模の縮小がなされ、それに伴い巫女の役割が減少あるいは無くなった神事についてだが、一月十日の「広田御狩」について惟朝は、鎌倉期においては大神事であり、多くの巫女が奉仕していたが今はその数も整える事ができず本当に悲しい、と嘆いている。「広田御狩」においては明らかに神事の退転とともに巫女の役割、数ともに衰退している神事といえよう。また、三月八日の「一切経会」は、前項でも述べたが元禄期には巫女が舞台に登り供舞することがなくなっている。惟朝はこの件については六月の晦日に末の巫女が堺に供奉する旨を記し

ているが、「一切経会」との関係は不明である。

もうひとつ、『松葉大記』に巫女の登場が見えなくなった神事に「御田植」がある。「御田植」は「はじめに」にも述べたように住吉大社の代表的な大祭であり、元禄期には以前の賑わいより退転したとはいえ、田楽、風流など多くの演者が奉仕し、植女には堺乳守の遊女が奉仕している。鎌倉期には遊女奉仕の記述が無くその当時は奉仕がなかったと理解してよいだろう。江戸期の遊女の奉仕については、神功皇后が長門の植女を連れてきて乳守に住み着き遊女となった、などの伝承があるがいつ頃から始まったかは定かではない。また、元禄期になぜ巫女の奉仕がなくなったのか、祭事の退転によるものとは状況からは考え難く、遊女の奉仕の参入と関係があるのかはもちろん不明である。後にも述べるが、「御田植」への巫女の関与は元禄期においてはほとんどなかったといえる。

以上より、神事の退転により明らかに巫女の役割、登場が減少した神事もあるが、必ずしもそうともいえない神事、すなわち時代の変遷による神事内容の変容により、巫女が退転した神事もあると思われる。

では次に、元禄期の巫女の奉仕が鎌倉期より盛んになった神事についてみていきたい。

二月の「祈年・新嘗両度ノ御祭」(元禄期)には次のような記述がある。

巫女両檢校二人同候神殿左右、御戸帳五人目六人目自神殿出而以天平盆受土器、時巫女以神宝所持取左右所置之机上土器各々二枚巫女二人土器四枚而安天平盆、御戸帳則奉薦神前、「次御戸帳出神前候机傍」是為備神盆也、四社共各々如此、巫女謂此事云參神盆

すなわち、「祈年・新嘗両度のノ御祭」において、巫女と檢校は神殿からの天平の盆に土器を受ける役目であり、巫女たちはこれを「神盃ニ參ル」と称しているというのだ。『諸次第』の記述は「勘所司八人・巫女等著座、酒肴一献ノ之後徹ス」とその後の多くの社人とともに並列する様子のみであるから、ここに表れている巫女の役割は明らかに後世になって重要になってきているといえるのではないだろうか。「祈年・新嘗両度ノ御祭」とは国の安泰

と五穀豊穡を祈願する神事であるが、神事においては木綿と土器が神への供物としての主役を務めている。<sup>(25)</sup> 巫女はこの土器を神前に奉る重要な役割を担っているといえよう。

また、六月の「夏祓・夏越ノ祓」では、『諸次第』の「荒和ノ御祓」に記された「巫女・馬長・田楽御前ヲ渡テ南ニ行ク」などは「皆断絶矣」してしまっているが、「今日巫女二人神輿ニ供奉シテ堺ニ至ル」様子が記され、堺では開口神社の巫女が索餅や酒の膳をもつて奉仕している。この内容より前述した「フロイス記」にあるような、鎌倉期の巫女・馬長、田楽・猿楽、あるいは多くの神官や社僧を伴って盛大に堺の開口神社や住吉大社の頓宮である宿院に供奉することは廃れてしまったが、元禄期には巫女による神輿の供奉が残されていることがわかる。

もうひとつ、元禄期の巫女の役割が重要になっているのは八月の「花摘ノ御供」である。『諸次第』の記述は「辰刻四社御供備進、名花摘御供」のみであり、その式次第詳細はもちろん巫女の記述も見られない。しかしながら、『松葉大記』による元禄期の「花摘ノ御供」は次のように記されている。

#### (前略)

今朝御供又名陰御供、又名花摘、蓋折秋花奉手向、至今手折萩花結添御幣、以魚肉・香類・果蔬・菜蔬種々物供神膳、(中略)、「追記」「今儀式上下神官四人立一切経会殿上西、巫女持御幣立中門下、(中略)、時各々参御前、御供備進如常、巫女・所司立神殿左右、権少祝取巫女幣渡正禰宜、

これより、「花摘ノ御供」は秋の花を供え、萩の花を御幣に結び、魚肉や香の物、果物や野菜とともに奉納する、いわば「女性らしい」花の神事といえる。

棟国の記述が極めて簡潔である点について惟朝は何も論じていず、当時の式次第自体が簡潔であったのか、あるいは何かの理由があったのかは定かではないが、記述の内容どおり理解するならば、近世には「花摘ノ御供」は中世時より盛大になり、巫女の神事奉仕もなされるようになったといえる。その理由は何であったかは勿論知るこ



とはできないが、近世文化が華やかに醸成される中で、「花摘ノ御供」という花をモチーフとした祭事がもてやされるようになったとも想像される。神事、祭事の多くが近世には大きく退転しつつも、時代の要請により神事が盛大に催行されるように変容することは当然であり、この祭事がこのように変化したとしても不思議ではないであろう。

以上をまとめてみると、確かに惟朝が嘆いているように神事自体が退転、衰退しそれに伴い巫女の役割が減少した面もみられるが、総じて見るならば、巫女の役割は決して小さくはなっていないのではないかと思われる。

### 三 「職役部」の「巫女」から窺う巫女の組織と役割

惟朝は「職役部」の「巫女」の項の最初に次のように述べ、巫女の職掌や組織について詳述しており、「巫女」の説明は「職役部」においては最長のものとなっている。

神官帰属客方等婦女依家為巫女、凡年中巫女役儀故実伝来甚多矣、今举其大要举記斯、

この短い文章から、当時の住吉大社巫女の役割が大変大きなものであったことが窺い知れる。

月毎の役儀、および組織についての記述など重要と思われる内容を抜粋したのが次のとおりである。

正月 七日御幣紙一束式帖但十二枚作半紙也自巫女十人之恵比寿頭出之渡置正禰宜、毎月朔日神方一藹如正禰宜家請取調御幣、同晦日神樂所大仲間每一人巫女神方総云大仲間也以銀一錢渡巫女戎頭、巫女十人仲間分賦之、昔以此料足臼神餅年頭備神供撤畢分之、今以錢配賦、名云鏡代、

三月 自巫女一小路家出膳於大仲間、謂之塩踏膳、名義未詳、

(中略)

同月自巫女大小路家亦出塩踏膳大仲間、大蛤、三充沼田和、其外同前、一小路与大小路塩踏饗膳有有前後差、

六月 自巫女左右檢校左右勾当四人出酒肴於大仲間、白瓜香物漬山椒等物為肴、各入重箱、為酒代銀一錢目充、  
八月 朔日自巫女初入神樂所者出自白銀廿錢目、謂之花頭銀、以此銀用來八日花摘神供料、出花頭銀者八日朝持幣自神樂所至一神殿御前、若其年無巫女入始神樂所者、則自神樂所大仲間出右銀、此時御幣持檢校之役也、

十一月 廿三行惠比壽祭事、先前日廿二日自巫女惠比壽頭十人出御供白米一人二升充、其子其孫出白米一升充、並有用脚渡神方、於御厨調神膳、自廿二日日至夜、蒸米高八寸許之饗、其上置丸握飯一箇、名鳥子、  
(中略)

廿三日、早旦神供四前備神樂所宝前、其外饗膳悉並置、次巫女神方举会座席就会饌酒、陪膳之役神方若輩也、巫女十人仲間各々持惠比壽像、此日於神樂所以紙作惠比壽神衣、及晚頭以潮洗清惠比壽頭像、而後新製之紙衣覆彼像、每年今日改神衣、謂此惠比壽祭、又名御部屋祭、持此神像之故云巫女十人之戎頭乎、所謂十人者一ノ小路・大小路・松本・機板・坂井・三位・北村・浜口・香頭・辰己、以上是也、以彼戎像讓子孫崇尚焉、凡供米調理認巫女十家之役也、余不能出之、又每月朔日自浜口家出酒一升備神樂所宝前、

十二月 八日御経供養於神樂所奏神樂二座、並供米二裏調進御経所、其一裏送家司、此下行米一斗二升但以八合升量之自家司出之、其内二升巫女左檢校得分、其余大仲間配分之、

これらの内容について検証していきたい。

## 1、「巫女」について

まず注目されるのは、惟朝が「巫女」の表記について「ヤヲトメ」と振り仮名をうっていることである。神社で神楽を奏する女性を「八乙女」と表記し「ヤヲトメ」と呼称する事例は多く存在するが、「巫女」と表記し「ヤヲトメ」と呼称する例は類を見ない。ここでは深く触れられないが、惟朝が「巫女」を敢えて「ヤヲトメ」と呼んだ背景には、当時社会における「巫覡」覡にあると考えられる。近世において大神社における神職者たちにとって、下層に生きる民間宗教者である「巫覡」は朝廷祭祀に関わる「御巫」と同じ「巫」を表記されるが全く違ったものであり、「巫覡」の存在故に自分たちの地位も低く見られる、といった観念を有していた。<sup>(26)</sup> また、大神社以外においては「ミコ」と称される梓神子や市子などの下級の巫女たちが多く存在しており、惟朝はこうした時代の動向を受け「巫女」を「ミコ」とは呼び難かったのではないか。確証は勿論ないが、惟朝は『諸次第』やその他の旧記にも「巫女」と表記されており、「巫女」そのものの表記は変え難く、神社に奉仕している女性の呼称のひとつであり寿福的呼称である「八乙女」から、「ヤヲトメ」を用いたのではないかと考えられる。<sup>(27)</sup>

尚、本文中『松葉大記』の引用文には振り仮名、および返り点は省略している。

## 2、神楽所組織の在り様

次に巫女を含む神楽所組織についてみてみたい。ここでは「巫女神方総テ大仲間ト云フ」と書かれており、神楽所が巫女と神方とで中世における「座」<sup>(28)</sup>のような「仲間」が組織されていたのではないか、すなわち、大仲間は住吉大社において一定独立した職役組織として機能し、神楽奉納料の管理なども行っていた可能性があると考えられる。神方とは『松葉大記』「神方」によれば「所謂神人方也、此神方恒ニ神楽所ニ在テ巫女方ト与ニ神楽ヲ奏ス、諸祭神供ノ経栄調備神厨ノ神人之ヲ弁ス、神主出仕車輿ノ御前、炬神事ノ撤供神幸ノ供奉勤ムル所ノ役儀甚タ多

シ」とある。すなわち巫女と共に神楽を奏す他、諸祭神の供物を調達分別、神主の車輿を引導、神事の松明の準備や後片付けなどの雑事を多く受け持っていた下級の神職集団であり、巫女たちとはその職役において協力関係にあったといえよう。

住吉大社の中・近世における史料が極めて乏しい中、「大仲間」がどのような組織であったかは十分検証することはできないが、中世における巫女集団の「座」について脇田晴子の「中世祇園社の「神子」について」<sup>(29)</sup>から窺う事ができる。脇田によれば、左右の神子が居て大座を組織し「祇園社座」と呼ばれていたこと、また、社座の神子とは違う「宮籠」という祇園社下の下級神職の妻や子で組織された神子集団が存在し、男女を問わず座を形成し、女は神楽を舞い、男は囃子を担っていたという。また、松村和歌子は春日大社においても、「春日大社若宮之記」(東大寺蔵『反故堆』所収)に近世の初期には巫女と神人とによって神楽が奏上され、御師として参詣者を案内する神人とは協力関係にあったことが記されていることを明らかにしている。<sup>(30)</sup>

これらはもちろん、時代、社の規模、組織背景ともに相違があり一概には比定されるものではないが、少なくとも、中近世における巫女集団の形成、運営においては、神人などの下級神職と協力関係にある点では共通するものであるといえよう。しかしながら、『松葉大記』における「大仲間」が、近世の職役集団としての「仲間」として機能していたかについては今後の検証が必要であろう。

### 3、巫女組織について

巫女組織そのものについて、前記『松葉大記』抜粋内容傍線部分(傍線は筆者による)より、神官や帰属客方等の社家の婦女が巫女となり、一小路、大小路を筆頭に松本・機板・坂ノ井・三位・北村・浜口・香頭・辰己の十家で組織されている。各々の家には恵比寿頭を有し、代々子孫に譲り渡され篤く崇められ、それ故にこの十家を「巫

女十人の戎頭」といわれた、ことがわかる。これら十家がどのような家筋なのか、「氏族部」の「諸氏」に坂井氏と松本氏が載っている。坂井氏とは津守氏の嫡子である大領氏を出自とし、松本氏は惟朝と同様の客方であるという。『松葉大記』にはこれら二家以外の氏名、家名は見当たらず、巫女の筆頭である一小路、大小路をはじめ坂井、松本以外についてはほとんどわからない。しかしながら、坂井、松本の二家が惟朝の記したように「神官、客方等の社家」であることから、他の巫女家も多くの氏族で構成されていた住吉大社社家の一族であったことは間違いないであろう。

では、この十家がどの位の人数によって組織されていたのだろうか。『松葉大記』には具体的な人数は巫女十家しかないが、各家には少なくとも「頭」を頂点とし末の巫女まで数人を擁していたと考えられ、また、多くの役割とその機能からみて最低二・三十人は下らなかつたのではないだろうか。享保元年（一七一六）刊行の『住吉名所鑑』「社家社僧附」には「神楽所太夫七十余人」とある。この人数は当然神方を含めた数であるが、巫女はこの半数以上を占めていたと考えても良いのではないだろうか。<sup>(1)</sup>

尚、巫女十家と恵比寿神との関係については、広田御狩神事とともに今後の課題として後稿に譲りたい。

#### 4、巫女の役儀内容

巫女の具体的な役儀を整理すると次のとおりとなる。

##### ① 御幣作製のための紙の調達

・正月七日、巫女十人の恵比寿頭が御幣作製のための半紙一束二帖（十二枚作りの半紙）を正禰宜に渡し、毎月朔日に神方の一臈が取りに行き、御幣に仕上げる。

つまり、御幣用の半紙一束二帖とは十二枚作りの半紙を一個としたものが十二個ということであり、相当な量と

いえよう。紙が貴重品であった時代にこのような量の紙を調達できる巫女組織は、この役儀ひとつをとっても相当の経済力を有していたと考えられる。

## ② 膳・酒の設え

- ・三月、巫女一小路と大小路より「塩踏の膳」が時を定めず、大仲間全員に一膳ずつ振舞われる。
- ・六月、巫女左右検校左右勾当とともに酒肴を大仲間に出す。
- ・十一月、恵比寿祭では、御厨において豪華な神膳を大仲間の数を調う。
- ・毎月朔日、浜口家より酒一升を神楽所の宝前に備える。

十一月の恵比寿祭以外の三月、六月の膳は不定期に出されており、何を目的とした膳かははっきりせず、「塩踏の膳」の名義もわからないという。しかしながら、これらの膳・酒肴は巫女集団が大仲間に対し、時を計らって労いの膳を調べていたのではないかと想像されるものである。

## ③ 鳥目（金銭）

- ・毎月晦日、大仲間一人毎、戎頭に銀一錢を渡し、巫女十人でこれを分ける。昔はこれで正月の餅についてその後その餅を配っていたが、今は錢を配っている。それでこれを鏡代という。
- ・六月十六日、一小路、大小路、開口の巫女より鳥目一貫文を大仲間に出す。
- ・八月朔日、初めて神楽所に入る巫女は白銀廿錢目を出す。この銀は花摘祭の神供料となり「花の頭の銀」と謂われている。

神楽所の運営がどのようになされていたか、その全体像が明らかでないため巫女から供出された金高の評価はできないが、巫女が大きく関わる神事においてはそれ相当の負担をしていると思われる。六月十六日は「荒和の祓」神事日であり、巫女が神輿に供養する役割を担い開口社まで同行している。また、「花摘」は「神事部」の項で述

べたように、巫女が活躍する「女性らしい」神事であり、巫女たちにとっても大切な神事として受け止められているのではないだろうか。これらに対し、住吉大社の最大神事のひとつであり女性が多く奉仕する「御田植」には何ら関わりが見えない。「神事部」において、元禄期の「御田植」には巫女の奉仕がなくなっている旨を指摘したが、やはり巫女は「御田植」には参列奉仕はもちろん、金銭的な関係をも持っていないことがわかる。

#### ④ 供米

・十一月廿三日、巫女恵比寿頭十人は供米として一人白米二升を出す。その子、孫は一升出す。

・凡その供米の調達は巫女十家の役である。

・十二月八日御経供奉において供米二裏を御経所に、その一裏は家司へ。

「凡そ供米の調達は巫女十家の役」というのは恵比須祭についてなのか、あるいは神事全体を指すのか、文脈から考えると恵比寿祭がふさわしいように思えるが、次に惟朝は「余不能出之」と述べている。すなわち、「私にはとてもこのように米を出す能力はない」というのだから、相当量の米を意味していると考えてよいだろう。また、恵比須祭の供米調達は前述しており、これから考えると住吉大社の多くの供米の調達は巫女十家が担っていたと理解できる。また、社ならず御経所にも供米を調達しており、巫女組織からの供米の調達は相当大きいものであったと想像される。

住吉大社には二千六十石の社領を安堵されていることは前述したが、そのうち五百〇十石は津守家の持分であり、残りの石高のみで何百人もの社人の生活、および多くの神事執行に必要な御幣、膳、酒、米などを賄うことは不可能であったであろう。これらの多くを補完していたのが神楽所、巫女組織であったといえる。こうした巫女の経済力を支えていたのは何か、『松葉大記』には何も記述はないが、他神社の例や前述した近世における住吉大社の地誌などからみる神楽の様子から、やはり一般参詣者、および堺、大坂の商人などからの御神楽料の収入が相当あつ



たものと考えられる。<sup>(33)</sup>

#### 四 住吉大社における神職組織と巫女の位置

これまで、住吉大社巫女は神事において重要な役割を果たしていたこと、神楽所において神方と共に「大仲間」を組織し、経済的に大きな力を有していることなどを述べてきたが、では神職組織全体において巫女はどのような「位置」にあつたのかをみていきたい。

『松葉大記』『職役部』には三十種の職役についてその役割、機能が記されているが、巫女は三十種中二十番目に位置し、伶人の次に記されている。職役の記述順位は正神主から始まり、権神主、家子（津守家の子孫を言う）、政所目代、神方、伶人、巫女と続いており、明らかに重要な職役からの記述であることは間違いないであろう。惟朝は「伶人」の項の後書に「淨写ノ時、伶人ヲ勘所司ノ上ニ置ク可」と書いており、一旦伶人を巫女の前に位置したがやはりそうではなくそれよりも四位上にあるべきと認識している。住吉大社の舞楽は『諸次第』の記述より鎌倉期においては盛大に奏されていたことが窺えるが、『松葉大記』の記録にはその多くが退転し、「今其ノ家裔偶々二人住吉ヲ離レテ他所ニ住ス」状態になつていることが認識される。巫女は神楽を奏する他、多くの役割を持つているにも関わらず、同じような楽奏を担う伶人がこの状態にも関わらず、惟朝は巫女を伶人より下位に認識している。これは『松葉大記』『舞楽部』に記されているように住吉大社の舞楽が極めて優れた歴史を有していたこと、そして明らかに舞楽、雅楽と神楽の歴史、社会的位置づけの相違によるものと思われる。舞楽が朝廷や大寺社で特定の伶人によつて奏されるのに対し、神楽は地方、庶民にも広く行き渡つた宗教芸能であり、参詣者より奉納金を受け取るということからも、身分の高い者が奏するものではなかつたのではないだろうか。<sup>(34)</sup>

堺市博物館学芸員吉田豊氏は「中世の住吉社―氏族と職役―」<sup>(35)</sup>において、住吉大社の複雑で多岐にわたる中近世

の氏族と職役組織について論じている。その中で巫女とともに神樂所大仲間を組織していた神方神人は、神官の中では最下位に位置するとしている。すなわち、神事執行以外の諸雑役を担う神官外の職役を除けば神職としては最下位に位置するわけである。ここでは巫女の位置は明らかにされていないが、当然巫女はこの位置にあるといえう。

以上より、住吉大社における巫女的位置は多くの役割を持ちながら決して高いものではなかったことが窺えるが、それは近世において神樂を奏する女性の位置としては当然であつたといえるかもしれない。

しかしながら、ここに住吉巫女の「力」を示す古文書がある。堺にある住吉大社の末社であり神事等にも縁の深い開口神社の古文書である。<sup>(36)</sup>

乍恐編答以書を奏申上候

戸田代長右衛門と申者二而御座候

一、此度、被為仰付候趣、奏畏候、此之訳之義者、三年以前四月二、戸川并私江対シ住吉みこ市路守。大小路守、右兩人より新規二一札致、為うん上、沓ヶ年二錢六百三拾式文、銀三匁、急度相渡シ候様二、申来り候二付、古来書物等吟味仕候処、左様之義、是迄以曾而無御座候、二付、一札不仕候処、又々申来り候二付、様子御尋被為仰候二付、乍恐、奏申上候御事

(中略)

宝曆貳年申八月

戸川代奥村長右衛門<sup>㊤</sup>

御寺内様

これは開口神社神樂所の戸川長右衛門が、御寺内様に対して出した返答書状である。住吉大社の巫女の市路（一小路）と大小路の兩人より、新たに運上金を出せという申し出があつたが、今迄そんなことはなかったので受け付

けなかった。ところが、再度申し付けてきたので申上げる次第です、という内容である。どのような書状に対する返答書であり、この顛末がどのようなになったかは不明であるが、この文書より明らかにすることは、住吉巫女組織の筆頭の一小路と大小路の兩人が、末社の社の巫女（神樂所）に対し運上金を要求できる立場にあるということである。確かに、開口神社は住吉大社の末社であるから、上下関係にあったのは当然であるが、巫女自身がこうした運上金請求を行使できる立場にあるということは、やはり、内外において相当な「力」を有していたといえるのではないだろうか。

### おわりに

本稿は、住吉大社に残された貴重な近世史料である『住吉松葉大記』をテキストとし、住吉大社における近世巫女の姿を明らかにしたものである。

吉田豊氏によれば、住吉大社に関する資料として残されているのは、古代史では『住吉大社神代記』、鎌倉期の『諸次第』、近世では『松葉大記』の他、数種の年中行事記と地誌・案内記、若干の古文書が伝存しているのみだとのことである。<sup>37)</sup> 他の大社、例えば春日大社や八坂神社、石清水八幡宮など多くの神社には中世の社領に関する文書や近世の幕府とのやり取り、政所の出納に関する文書が数多く残されている。<sup>38)</sup> 開口神社においても、多くの古文書が『開口神社史料』として公刊されている。こうした古文書がほとんど存在しない住吉大社史料状況、および、「はじめ」に述べた近世神社巫女研究の現況から、住吉巫女研究にはやはり文献検証に困難を伴い、推論の域を出ない考察が多くなってしまったことは否めない。これはもちろん私自身の力量不足によるものが大きく、今後の課題として受け止めたい。

しかしながら、こうした現状の中でも、近世における住吉大社の巫女は、神事において神樂を奏するだけではな

く神事執行にもその役割を果たしていること、巫女組織が恵比寿頭を持った十家で成り、神樂所において「大仲間」を組織していること、御幣の紙の調達や供膳、供米などの調えなど多くの重要な役割を持ち、これらから経済的にも力を持っていたこと等が明らかにになった。また、他の大神社では神樂所組織の運営は男性の神官、神樂男が主権を持っていたと思われるのに対し、住吉巫女は組織運営者として存在していた可能性が極めて大きいと考えられる。男性優位の近世社会において、住吉大社になぜこのような巫女組織が存在し得たのか、この解明は今後の課題ではあるが、現在の段階においては祖神としての神功皇后の存在が大きいこと、やや上層の神官である客方帰属等の女性達によって組織されていたこと、加えて神樂奉納による収入が莫大であったことなどが考えられる。いずれにせよ、こうした近世住吉巫女の姿は、今までの巫女研究において極めて新鮮な存在といえるであろう。

二〇〇八年に吉川弘文館より『近世の宗教と社会』（全三巻）が刊行された。澤博勝氏による「あとがき」によれば、このシリーズは「近世の宗教と社会研究会」における成果の一部であり、研究会は澤氏をはじめ、青柳周一、井上智勝、西田かほるの四氏が呼びかけ人となり一九九九年に発足し、その後多分野にわたる多くの近世研究者が集い研究を重ねたとのことである。確かに、「シリーズ」の内容は近世における宗教に関する諸問題にわたっておりその成果を窺えるものである。しかしながら、女性と宗教に関しての論考は西田氏が少し触れているのみで、ほとんど具体的な研究成果としての報告がないというのが現状のように思われる。今後の「近世の宗教と社会」研究において重要な課題の一つが、近世女性にとって宗教はどのような存在であったのかの追究であると思われる。宗教者の立場と、宗教を被る立場の相互からの研究が求められているのではないだろうか。本稿が、こうした近世における女性と宗教に関する研究の一考となれば幸いである。

註

- (1) 現在大阪新町芸妓の奉仕は無くなっている。住吉大社権禰宜小出英詞氏の「新町と御田植神事」(『大阪春秋』新風書房、二〇一〇年)によれば、新町の芸者が存在しなくなり、平成元年(一九八八)より財団法人上方文化芸能協会が担当するようになったとのことである。
- (2) 神田より子『神子と修験の宗教民俗学的研究』岩田書店、二〇〇一年、平山眞『巫女(ふじよ)の人類学―「神語り」の記録と伝達』日本図書センター、二〇〇五年などがあるが、いずれも東北地方の現代ミコの地域的研究である。
- (3) 中山太郎『日本巫女史』一九三〇年、山上伊豆母『巫女の歴史』一九九四年、雄山閣などがある。
- (4) 西田かほるは「神子」(シリーズ近世の身分的周縁Ⅰ『民間に生きる宗教者』、吉川弘文館、二〇〇〇年)において甲斐国の神社神子について論じている。また、中野洋平は信濃地方の梓神子、神事舞太夫などを中心に研究を行っている。
- (5) 井上智勝は『近世の神社と朝廷権威』(吉川弘文館、二〇〇七年)の序論において、敗戦以前には、天皇に関する研究視野は著しく制限されていたこと、また、戦後は、国家神道・皇国史観と直結していた神社は歴史学において天皇・朝廷研究同様、研究対象にはなり難かった旨を述べている。
- (6) 奥本武裕は「近世前期寺院復興運動と「女性」」(総合女性史研究会編『女性と宗教』吉川弘文館、一九九八年)において「近世仏教史研究は、いまだ「女性」の問題を正面から議論しうる水準を共有していない。」と指摘している。このことは、女性と宗教に関する研究が近世全般において十分に成されていないことを意味するであろう。また、『女性と宗教』に所収されている15論文、近世に関するものは奥村論と浅野美和子の「民衆宗教の女人救済論」のみである。
- (7) 柳田国男は「巫女考」「ミコと云う語」の項で、様々な「ミコ」が存在していることを述べるとともに、「巫女」「神子」「巫」「御子」などの表記を用いている。
- (8) 本居宣長は摂津国菟原郡の住吉村(現在の神戸市東灘区住吉)を創祀地としているが、田中卓氏は『住吉大社神代記』の記述を根拠として、現在の地が創祀の地としている。田中卓『住吉大社神代記』(図書刊行会、一九八五年、住吉大社編『住吉大社』(学生社、二〇〇二年改訂版)など参照。
- (9) 加地宏江『住吉大社の歴史』(大阪市立美術館編・発行『住吉さん』、二〇一〇年)十四頁。
- (10) 神功皇后伝説としては、応神天皇を身ごもりながらも三韓を征し無事帰還し出産したとして、軍神、海運の女神、あるいは安産の神さまとして祀られている。
- (11) 田中卓監修『住吉大社史』下巻(住吉大社奉賛会、一九八八年)第十一章「社殿と造宮」参照。
- (12) 前掲(11)第十二章第一節「上代の社格と奉幣」参照。
- (13) 前掲(11)第十五章「建武中興と住吉大社」、第十七章「住吉大社の神領と経済」参照。

- (14) 前掲(11)第十七章「住吉大社の神領と経済」一七九頁。
- (15) 渡邊忠司著『大坂見聞録』(東方出版、二〇〇一年)、『大坂十二月物語』(リサイクル社、二〇〇一年)など参照。
- (16) 住吉大社編『住吉大社』(学生社、二〇〇二年)「10俳諧と住吉」参照。
- (17) 呉秀三訳注『シーボルト江戸参府紀行』(雄松堂書店、一九七〇年)五七一頁。
- (18) 『住吉さん』大阪市立美術館編・発行、住吉大社協力、二〇一〇年、六十一頁。
- (19) 前掲(18)六十二頁。
- (20) 臼井史朗『神仏分離の動乱』(思文閣、二〇〇四年)には、日吉社、興福寺などにおける廃仏毀釈の背景と、その激しい様子が詳しく述べられている。
- (21) 『神道史研究』第五十四巻 神道史学会、二〇〇五年。
- (22) 大阪市史編纂所編『住吉松葉大記(下)』加地宏江「あとがき」より。
- (23) 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史3』(中央公論社、一九七八年)一五六頁。
- (24) 脇田晴子は「神興渡御と「神子」」(『中世京都と祇園』中央公論社、一九九九年)で中世の「祇園御霊会」には神子が神興に付き添い、それは神が乗る神輿には「託宣するものが付き添わないかぎり、神意を窺い知れないからである。」と述べている。住吉巫女も同様の役割を担っていたものと思われる。
- (25) 現在でも住吉大社では祈年祭・新嘗祭にともない「埴使い」があり、大和の畝傍山に天平盆の材料の土を採りに行く祭事が催行されている。前掲(16)十一「住吉の祭り」と埴使い」参照。
- (26) 小平美香『女性神職の近代』(ベリかん社、二〇〇九年)「近世の神社神職による「神職論」」において、近世の神職者たちの巫覡観や、巫女観について詳述している。
- (27) 朝廷における八神殿に代表されるように、八という数字は日本では古代より聖数、寿福数とされていた。また、春日の神楽巫女の定数は八人の八乙女とされていた。(芸能史研究会『日本の古典芸能』平凡社、一九六九年)七三頁。
- (28) 『松葉大記』「寺院部十七」には室町時代の神宮寺一切経会式次第が記されている。その中には「女巫女十六人左右本座八人・新座八人」とあり、住吉大社においても中世では巫女組織は「座」であったことがわかる。
- (29) 『京都市歴史資料館紀要』第10号、一九九二年。
- (30) 松村和歌子「神楽に神の声を聞く―春日大社巫女神楽の原像―」(『歴博』一四六号、歴史民俗博物館振興会二〇〇八年)。
- (31) 吉田豊「中世の住吉社―氏族と職役―」(真弓常忠編『住吉大社事典』、図書刊行会、二〇〇九年)によれば、近世における住吉大社社人の総人数は二百人を超えていたと思われる、とのことである。
- (32) 前掲(11)第十七章「住吉大社の神領と経済」一八二頁に「他の寺社を比較してみると凡そ二千石程度の社領であれば少なくとも五百石から千石迄の配分を得ていたと

推測できる。」とあり、社領からの収入の半分近くは津守家に入っていたと考えられ、また、そこから末社に配分されていたようだ。

(33) 前掲(11)に「禰宜八十人は地子等とは無縁で算錢(養錢)と神樂料が収入源であったといわれ」とある。

住吉社家の経済生活が、大坂の活発な商業活動を背景とする崇敬者や参拝者の報賽によって支えられていた旨が記されている。

(34) 神樂の起源は明確ではないが、巫女なる存在が神がかかりし神の託宣を受ける際の多様な神態にあるとされ、古くより宮廷はもとより日本各地で奏され、近世では里神樂や岳神樂などとして庶民の宗教的芸能として存在した。『日本の古典芸能 第一巻 神樂』参照。これに対し、舞樂は中国や東南アジアからの外来芸能であり、宮廷での演奏を主な目的とし導入された。その多くは多氏と狛氏によって伝承され、後に四箇法要として大寺社でも奉納されるようになるが、民間の芸能としての位置付け、

あるいは伝播はなかったといえよう。南谷美保『四天王寺聖霊会の舞樂』(東方出版、二〇〇八年) など参照。

(35) 前掲(31)。

(36) 開口神社社務所編『開口神社史料』開口神社発行、一九七五年。

(37) 前掲(31)「はじめに」。

(38) 『八坂神社文書』、『春日大社文書』、『石清水八幡宮史料叢書』など、多くの大神社の文書が翻刻刊行されている。

(39) 前掲(29)二〇七頁において、祇園社では中世半ばより次第に女性が締め出されていくようになった、と述べられている。また、前掲(4)の「神子」では、神子は本所を持たず、男性の下での神子職掌を行っていたという。他の大神社の事例を集積できていないが、これらより、近世における神社巫女の一般的な立場は推測できると考える。